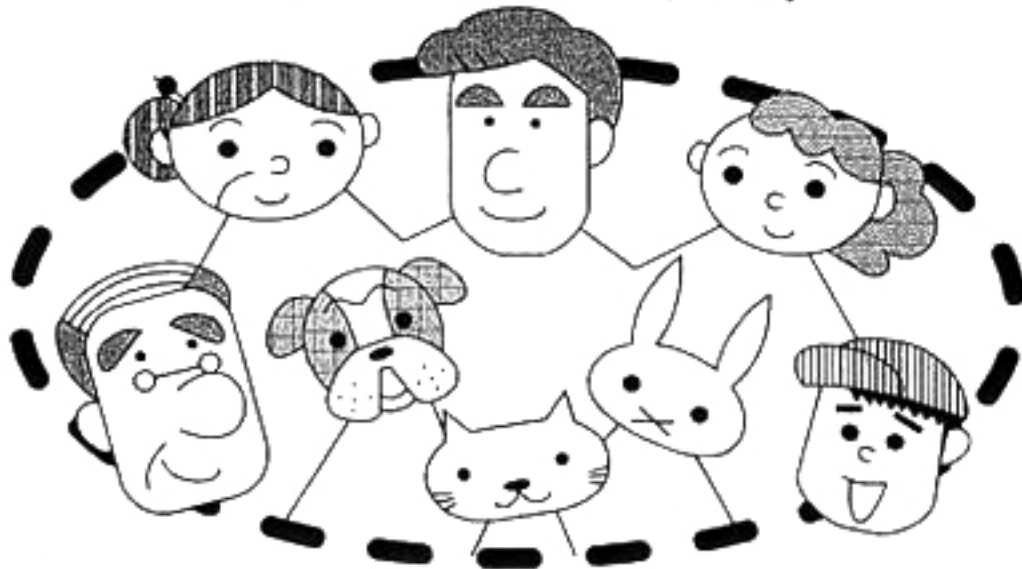


ペット感染症



健康に関する情報がいっぱい 遊びに来てね!

げんき君

<http://www.genki1616.co.jp>



ご不快な思いをされましたら、ただちに責任者までご連絡下さい。
本社フリーダイヤルでもお伺い致します。

☎0120-477955 (石田)

かちどき薬品グループ

ペット感染症を知っていますか？

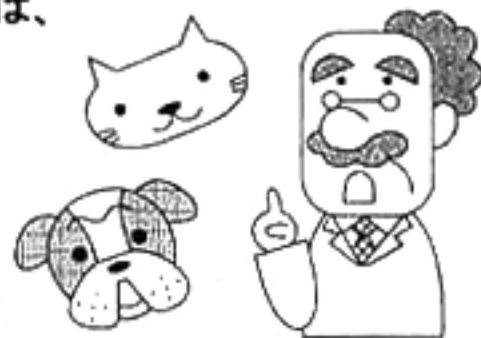
ペットは家族の一員。

でも、つきあい方でリスクがある!!

ペットブーム真っ只中、今やペットも人間同様、家族の一員として『共に暮らす』という時代になりました。ペットを飼ってかわいがることはストレス解消にもつながります。しかし、ペットは人間とは違った細菌などをもっています。ついつい人と同じように接してしまいがちですが、そこには感染症というリスクもあるので、ペットと正しくつきあい、共に楽しく暮らしましょう。

正式には『Zoonosis(ズーノーシス)』和名を『人獣共通伝染病』と言い、中でも身近なペットからうつる病気は『ペット感染症』と呼ばれています。

感染に関与する病原体は、
細菌・真菌・リケッチア・
クラミジア・ウイルス・
寄生虫・・・と様々。
動物別に見ても病気の
種類は数え切れないと
言われています。



ペット感染症にはどんなものがあるの？

➔ ペットからうつる病気の種類

国内で発症するものとして50種類、その内イヌやネコなどの小動物から感染するものに30種類挙げられています。小動物から感染する感染症のうち、命にかかわる病気は狂犬病くらいですが、予防活動に熱心な日本では1957年以降発症例はありません。その他の感染症は、人間にとっては病原性が弱く、健康で十分な免疫力を持っている状態であれば神経質になり過ぎる必要はありません。

➔ 感染の経路は？

ペットに咬まれたり、引っ掻かれたりした時に直接感染する場合や、動物の体についていた病原菌が手につき口から体内に入ったり、病原菌のついたフンが乾燥し、それを吸い込み間接的に感染することもあります。感染した動物の血を吸ったノミやダニ、力などから人間に感染することもあります。



➔ 誰でも感染するの？



子供や高齢者、他の病気で免疫抑制剤を使用している場合、感染の可能性が高く重症化することもあります。また妊婦が感染した場合、胎児に影響が出ることもあります。他の病気にかかっている時は体の免疫力が低下しているので注意が必要です。

◆主なペット感染症と症状◆

● 狂犬病



犬に咬みつかれた傷口から侵入したウイルスにより発病。性格が変わり、凶暴になる。発病後数日以内にほぼ100%が死亡する。海外ではまだまだ発生率の高い病気。

● イヌ・ネコ回虫症



フンによる汚染物質、回虫の卵が付着した毛が口から入り感染。回虫が人間の体内で幼虫のまま寄生する。内蔵移行型(肝臓)では咳、発熱、異食症など。眼移行型では、視野異常や飛蚊症などの自覚症状がある。

● パスツレラ症



咬まれたり、唾液が口から入り感染。ネコが100%、イヌが70%保有する常在菌が人間の呼吸器に感染し、風邪に似た症状を示す。発病者は、圧倒的に子供や高齢者に多い。

● トキソプラズマ症



フンによる汚染物質、感染豚・羊などの生肉から感染。成人の場合、無症状であることが多いが、妊婦が感染した場合、死産や流産などの影響が出ることもある。

● ネコ引っ掻き病

イヌ ネコ

ネコに引っ掻かれたり、咬まれた所から感染。患部が赤く腫れ、微熱が続き、全身倦怠、リンパ節の腫脹。軽症なら、自然治癒する。潜伏期間は1～2週間。

● Q 熱

イヌ ネコ

フンによる汚染物質が口から入り感染。急激に発症し、40度前後の高熱、頭痛、筋肉痛などが2週間程続く。潜伏期間は2～4週間。

● サルモネラ症

イヌ ネコ カメ

フンによる汚染物質が口から入り感染。激しい下痢と腹痛の症状が出る。

● オウム病

鳥

咬まれたり、フンによる汚染物質、唾液が口から入り感染。発熱や頭痛、関節痛などのインフルエンザに似た症状。重症の場合は、呼吸不全や意識障害、臓器不全になることも。子供と高齢者は症状が重い場合が多い。潜伏期間は1～2週間。

④

ペット感染症の予防

➔ 日常生活で注意すること！

1. 飼い犬は予防接種と登録をする
2. キス、口移し、食器の共用、一緒の布団で就寝するなど過激な触れ合いは控える。
3. ペットを触ったら必ず手を洗う
4. ブラッシング、シャンプー、爪切りなどペットの手入れは細やかに、その周辺はいつも清潔に。
5. 室内飼育では、こまめに換気する
6. 糞尿は直ちに処理する
7. 公園や砂場で遊んだ後、ガーデニング等の後は、十分な手洗いをする。
8. 輸入野生動物の飼育はしない
9. 病気の早期発見のため、ペットも獣医師による定期健診を行う。
10. かかりつけ動物病院を持ち、飼い主はペットについての知識を得る。
11. 人間の体に不調を感じたら早めに受診し、医師にペットの飼育状況を伝える。

⑤

ペット感染症の対処法

➔ こんな症状に気づいたら

- ◆傷口、リンパ節の腫れ
- ◆傷口が治らない
- ◆発熱、関節痛
- ◆せき



ペット感染症は、風邪などの症状と似ていることもあり、なかなかそうだと判断することはできません。動物に引っ掻かれたり、咬まれたりした後上記のような症状に気づいたら、すぐに医師の診察を受けましょう。

体の不調などで医師にかかる場合は、とりあえず飼っている動物の種類を医師に告げることが、ペット感染症の発見につながります。実際にペット感染症にかかった場合でも、ほとんどの治療は簡単で、抗菌薬や抗生物質を服用する程度で治すことができます。



⑥

海外で気をつけたい動物感染症

➔ 日本とは事情が違うので要注意！

海外旅行の場合、野生動物や昆虫などによる感染症に気をつけなくてはなりません。例えば、狂犬病は日本では予防接種が盛んに行われているため、近年発症例はありませんが、他のアジア地域やアフリカでは毎年多くの患者が出ています。イヌだけでなく以下のような野生動物には注意が必要です。



●狂犬病の危険性が高い地域

- ・タイ
- ・南米諸国
- ・インド
- ・アフリカ諸国
- ・ネパール

狂犬病は発病したら死亡してしまう怖い病気で、世界的に見ると毎年3~5万が亡くなっています。ですが、咬まれた後でもワクチンを接種すれば発病を防ぐことができるので、動物に咬まれたら必ず医師に適切な処置をしてもらいましょう。

- プレーリードッグやリスなどのげっ歯類は、ベストの感染源となる危険性が高いと言われています。生息地にむやみに立ち入らない、手を近づけない、流行地ではダニやノミに咬まれないよう肌を露出しない、死骸には触れない、といった注意が必要です。
- 虫による伝染病もあり、マラリアや黄熱病は蚊が媒介して感染します。渡航の前に予防接種をするのはもちろんですが、肌を露出しないことや、虫除けスプレーも有効です。

⑦